

震災風化させない

紙芝居に巡る夏祭り 関係者贈 制作、寄



野田村で読み聞かせ活動をする大沢伸子さん。震災の風化を防ぐと活動する大沢伸子さん＝野田村

野田で読み聞かせ活動 女性決意

東日本大震災で北奥羽地方最大の被災地となった野田村。間もなく発生から6年を迎え、震災の記憶の風化が懸念される中、後世に語り継ぐ紙芝居「復活 野田まつり物語」が1月下旬にお披露目された。村外の支援団体が制作し、村に寄贈した。その「橋渡し役」

を務め、読み聞かせ活動を展開する村商工会女性部長の大沢伸子さん(68)は「実話を基にしており、村が祭りを通じ前を向いた状況を思い出した。震災を忘れないためにも多くの人に見てもらいたい」との思いを強くしている。

(工藤洋平)

紙芝居を寄贈したのは、震災で被災した八戸市から福島県いわき市まで太平洋沿岸部に「巡礼の道の創設を目指す、東北お遍路プロジェクト(仙台市、新妻香織理事長)。広島市の市民団体「まち物語制作委員会」の福本英伸さん(60)が制作した。題材となったのは毎年8月に開催している「愛宕神社例大祭・野田まつり」。震災では祭りに参加していた住民が津波で犠牲になり、三つの山車のうち2台が流失した。この年は被災から5カ月後の祭りの開催に賛否があったものの、村の有志が「祭りをなくすこと

はできない」と決断。悲しみを乗り越え復興への思いを込めて開催にこぎ着けた」という実話を基に描いた。

制作した福本さんは昨年8月に村を訪れ、地元関係者に取材。「震災で祭りをやる状況ではないが、復興に向け伝統文化である祭りが持つ力を感じることができた。紙芝居を活用してもらえてうれしい」と語る。村は紙芝居を村図書館に配置し、団体への貸し出しも予定。子どもから大人まで多くの人に読んでもらい、震災の記憶と教訓を共有し伝承したいと考えた。

「この年の野田まつり最終日、夜空に打ち上げられた花火を見て涙を流した記憶がよみがえった」と大沢さん。「津波で壊れたハード面での復興は進むが、村民の心の復興はこれから。引き続き取り組みなければならぬ課題だ」と肝に銘じた。

「手掛かり一つでも」被災地沿岸 捜索者不明



岩手県釜石市

東日本大震災の発生から5年11カ月を迎えた11日、岩手県と福島県では、警察が行方不明者とその手掛かりを求めて、津波被害に遭った沿岸部を捜索した。

岩手県釜石市西石町の海岸では、朝から警察官ら約10人が木の棒で砂利や枯れ草をかき分け、行方不明者の遺留品などを捜した。広島県警から出向し、仮設住